

吉田寅著『世界史教育の研究と実践』
(教育出版センター新社, 昭和61年)

木 村 勝 彦

本書は著者の吉田寅氏が「あとがき」に述べられているように氏の20年以上にわたる社会科学実践・研究の記録である。氏は現在、筑波大学に勤務され、宋代社会経済史・中国キリスト教史の権威として研究生活をおくっていられるが上記のように現場実践にも長期的に関わってこられたわけであり、従来、とかく懸念されていた社会科学教育と専門諸科学との関係という問題についても提言され得る位置にいる。それだけに本書も独特の内容となっている。

本書の構成は次の如くである。

第一章 学習指導要領の変遷と世界史教育

第二章 世界史教育における表記法の沿革と現状

第三章 文学作品を利用した世界史学習

第四章 文献・資料を利用した世界史学習

第五章 世界史教育の留意点

第一章は二節に分かれている。第一節では現在に至るまでの指導要領における世界史教育の変遷、およびその間の世界史教科書の変遷について概観されており、第二節はそれをもとに昭和48年度・57年度の指導要領がより詳細に検討されている。史実に忠実に基づいた著述であるが、文化圏学習および主題学習の由来、また現行指導要領におけるそれらの位置についての記述が中心である。特に文化圏学習の構想が時期的に指導要領よりも世界史教科書にさきみられるという指摘は興味深い。

第二章は世界史教育における表記法についての考察である。第一節では表記法混乱の淵源が明治以来の人名地名の表記法の歴史につながるものであることが示され、第二節では教科書の調査、生徒へのアンケート調査をもとに表記法の混乱が現場で起こっていることが述べられている。結果的に氏はその対策として、不統一を食い止め、そうならざるものに関してはその由来を生徒に理解させることを挙げている。

第三章は文学作品を利用した世界史学習という表題のもと、実践の結果を述べたものである。氏は基本的にはその意義を「感動をもって学ぶ」「生き生きとした人間の生き方を把握する」と

いう言にあるように文学作品利用の狙いを教師と生徒のよき教育関係を作るきっかけ — 生徒の学習における主体性の喚起 — にあると考えている。第一節では歴史文学を類型化した上でその方法として、作品の抜粋・要約の利用、文学作品そのままの利用、課題としての利用という3つを挙げている。第二節は氏が実際に行なった実践の記録である。そこでは平常授業における文学作品の利用と課題学習における利用の2つに分けられ、それぞれ授業記録の検討・生徒のレポートの検討などからほぼ狙い通り「生きた歴史感覚を得さしめること」において成果を挙げたことが述べられている。

第四章は文献・資料を利用した世界史学習についての実践をもとにした報告である。第一節では実践した後、生徒から得たアンケートによって資料の価値を検討し、留意点を析出している。そして第二節では具体的に「文明のおこり」「現代史における日中関係」を取り上げ、具体的で詳細な資料の検討を行なっている。本章においても氏はやはり「生き生きとした歴史像を把握する」「興味・関心と学習への意欲を喚起させる」とあるように前章と基本的には同じ立場である、生徒の学習における主体性の喚起においている。

第五章は「世界史教育の留意点」という表題で、前章、前々章で取り上げた以外の問題点について4節にわけて、考察されている。とくに第二節のグループ学習についての実践報告は興味深く、氏の所謂「生徒の主体性」を育む上での非常に有効な方法であったと考えられる。

以上概要を簡略に紹介したが、世界史教育の具体的実践をもとにした報告という本書の性格から考えてみると、その中心は実践の記録を中心に執筆された第四章・第五章であり、その基本的立場は多彩な教材の利用により生徒の学習における主体性を確保しようとすることである、といえるであろう。このような内容を持った本書の特長としては次の2点が挙げられる。1つは具体例として氏が提出した教材の解釈が非常に詳細・厳密であることである。これは氏が歴史学を専門研究領域にしているということにもよるのであるが、実践においては教材が極めて重要な位置をしめることを考えれば、これは非常に重要なことである。2つには氏も述べられているように自らの具体的な実践をもとに執筆されており、それだけに説得性を持っていることである。ただ、そのために書物全体としての一貫性にやや欠ける箇所も見られるのだが、それはかえって氏が克明に自らの実践・研究の道筋を示したことの裏付けでもあり、示されたものから全体として何を読み取るかは読者の責であるともいえよう。

ともかく本書は実践者にとっては特に教材解釈において示唆を受けることができ、また研究者にとっては現場実践を知るための格好の書物といえるのである。

以上浅学な筆者の故、氏の真意を十分にくみ取れなかった点多々存すると思えるが御容赦願いたい。

(筑波大学大学院博士課程)